



定価1600円（本体1553円）

ISBN4-88866-145-6 C0095 P1600E

津和郎再考

橋本迪夫

著者略歴

橋本迪夫（はしもと みちお）

1925年、インドネシア共和国スラバヤ市に生まれ、兵庫県神戸市で育つ。

1946年、慶応義塾大学国文学科卒業。卒業後母校の普通部・高校の教員を勤め、1990年定年退職。現在、杏林大学外国語学部非常勤講師。

日本近代文学会会員、日本近代文学館図書委員、文芸家協会会員

主著『広津和郎』（1965年、明治書院）

広津和郎 再考

1991年9月21日初版第1刷発行

著 者 橋 本 迪 夫

発行所 西 田 書 店

〒101 東京都千代田区神田神保町3-10

TEL (03) 3261-4509 FAX (03) 3262-4643

印刷／平文社

製本／丸山製本所

定価1600円（本体1553円）

© Michio Hashimoto Printed in Japan 1991

乱丁・落丁本はお取替いたします。小社宛ご連絡下さい。

ISBN 4-88866-145-6 C0095 P1600E

広津和郎再考

● 目 次 ●

第一章 『年月のあしおと』『続年月のあしおと』考

—— 自伝の問題点 ——

この本の成り立ち

7

I 先祖の血

11

広津藍溪と馬田昌調

11

祖父弘信と『自主之権』

15

父母とそのきょうだいたち

23

II 漂泊者魂と無用者意識

31

都市生活者と故郷喪失

31

成育期の環境と精神形成

40

反骨と脱出世主義

48

III 書かれなかった問題点

55

大正八年の転機

55

多角恋愛の問題

62

第二章 広津和郎の人と思想

I 大正デモクラット

85

II 自由思想家

95

III 「性格破産」と「散文芸術」補説

106

IV 政治・社会観

120

V 真の個人主義

137

第三章 作家・作品論

広津和郎論——その「弱さ」と「強さ」——

153

広津和郎の社会評論

173

神経病時代

191

あとがき

217

カ
バ
ー
デ
ザ
イ
ン
／
金
沢
草
彦

第一章

『年月のあしおと』『続年月のあしおと』考

——自伝の問題点——

この本の成り立ち

静岡県駿東郡小山町の富士霊園内に建てられた「文学者の墓」には、それぞれの作家の氏名や没年月日等のほかに代表作の名が一作だけ選ばれて刻まれている。広津和郎の場合はそれが『年月のあしおと』であった。

「年月のあしおと」は広津が古稀を迎えた昭和三十六年、『群像』の一月号に「年月のあしおと」という題名で掲げられ、以後昭和三十八年四月号まで毎号二十八回にわたって連載された。「年月のあしおと」という題名は三十六年二月号の附記で「年月のあしおと」と訂正されている。昭和三十八年八月、講談社から単行本として刊行され、第十六回野間文芸賞及び第十七回毎日出版文化賞を受けた。

「続年月のあしおと」は約一年間の休載ののち、昭和三十九年五月号から昭和四十二年三月号まで毎号三十五回にわたって『群像』誌上に連載され、昭和四十二年六月、講談社から単行本として刊行された。

概して言うと、正編『年月のあしおと』には、明治二十四年の作者の誕生から昭和三年の作者の

父の死に至るまでの自伝的事実と文壇史的事実が年代を追うて整った構成の下に、のびのびと描き進められている。

これは作者の抜群の記憶力と表現力によるが、作者が過去に発表した文章に、「年月のあしおと」と同じ内容を扱ったものが多く、作者にとっていわば手なれた材料であった事情も手伝っていると思う。

たとえば昭和三十六年一月号の『群像』第一回の掲載分だけでも、「矢来町附近」(大13・5『随筆』)、「矢来町と文学者」(大14・4・15～21『時事新報』)、「思い出の記」(1)(昭8・11『文芸首都』)、「思い出の記」(4)(昭9・3『文芸首都』)、「おもいで」(昭17・12『芸術の味』)等の既発表の関連のある文章がある。

また作家の面影を描いた文章の多くは、戦後実名小説として評判になり、『小説同時代の作家たち』(昭26・6文芸春秋新社)にまとめられたものを下敷にしている。

『年月のあしおと』に描かれた事実そのものについての作者の記憶はほぼ正確であるが、事件の起った年代については時に記憶違いが認められる。たとえば『群像』の文章で作者は芥川の自殺を昭和三年のこととしているが、この誤まりは『続年月のあしおと』の作者の「あとがき」で訂正されている。

また「六十二 大正八年という年」に描かれている三富朽葉と今井白楊の犬吠岬での溺死事件は、

昭和二十六年二月号の『世界』に「砂に残された文字」として発表され、『小説同時代の作家たち』にも収録された興味深い文壇エピソードであるが、私が疑問に思うのは、この二人の溺死事件は大正六年八月二日に起こった事故であるのに、「年月のあしおと」には大正八年夏の作者の奈良滞在中の出来事として描かれていることである。

以前広津が書いた「谷崎精二氏の印象」(大8・9「新潮」)を読むと、谷崎と親しかった今井の死が大正六年の出来事として記されており、さらに同人雑誌『奇蹟』の仲間で広津の親友である峰岸幸作の訃報を奈良滞在中に受け取ったという記事が見える。おそらく作者は長い年月の間に記憶が乱れ、今井と峰岸をとり違えたものではなからうか。

しかし多少の記憶違いはあっても、『年月のあしおと』には明治から昭和初期にかけての時の流れ、世相の変化、人心の移り行き、忘れ難い作家の面影などが実感的にとらえられており、自伝または文壇史としての価値はいささかも減ずるものではないと思う。

それに比べて『続年月のあしおと』の方には、作者の晩年の情熱を傾けた松川裁判が終った安心感からか、あるいは健康の衰えのためか、正編ほどの緊密な構成が見られない。

単行本と『群像』発表の文章を比較すると、『群像』の「二 二人の強情な老作家」、「六 明治座の楽屋裏」、「七 直木三十五」、「八 三上於菟吉」、「九 余りに早く来た落葉期」、「五十 何ともいえぬ違和感」、「五十一 谷中の墓地」の各章が削られ、新たに「四十 白河への逃避行」が書き

加えられており、他に加筆されたり改題された章もある。

削られた章のうち、「二 二人の強情な老作家」には、父柳浪の日常生活での我がままさや、自作の脚色上演問題で真山青果と論争する、柳浪の一徹な文士氣質を表わす面白い場面があるが、父への配慮からか削られてしまったのは惜しい。

続編の記述が正編に比べてのびやかさを欠いているのは、このような構成の立て直しのためでもあるが、「あとがき」で作者が言うように、続編の対象である昭和の戦中期が、思い出すだけでも戦慄を覚えるような暗鬱な時代であったことと関係があるろう。またそれに作者の私生活の乱れが重なって、X子との交渉を描いた章などは、書きにくいことを告白する気持ちで筆の運びを鈍らせたことも考えられる。

しかし『続年月のあしおと』には、菊池寛との「女給」事件や、「文芸懇話会」^(注2)での徳田秋声や島崎藤村の発言等の文壇の裏話をはじめ、戦時下の朝鮮や満洲の視察体験、乏しい戦時下の食糧事情や、悲惨な空襲体験等、当時の国民的体験の貴重な証言が豊富に織り込まれており、作者の時勢に対する毅然とした態度と相まって深い感動を与えられる。

このように正統『年月のあしおと』には自伝と文壇史の二つの側面があるが、私は主として自伝的側面に照明を当てて、種々の角度から広津の人物像を浮び上らせてみようと思う。

I 先祖の血

広津藍溪と馬田昌調

『続年月のあしおと』の冒頭の三章、「一 柳浪が作家となるまで」、「二 先祖の血」、「三 『血』の頽廃か」はすべて父柳浪を中心に広津家の家系に関する説明に充てられている。

作者が自家の家系問題を書いたのはこれが初めてではなく、『都新聞』（昭13・6・9〜10）に発表され、のち随想集『愛と死と』に収録された「朝顔日記の作者」が最初であろう。

その記事によると、彼は子供の頃に広津家の先祖は薩摩の人島津蔵久であると聞かされていた。豊臣秀吉の島津攻めの時、蔵久ははじめ秀吉と戦うことの不利を説いて和平を主張したが、開戦後は徹底抗戦派になり、兄義久が秀吉に降服した後もひとり降服をがえんぜず、肥前か肥後に落ちのびて、広何とか村に身を隠し、その村の広と島津の津を取って広津の姓を名乗ったのが、広津家の始まりだと系図に書いてあるとのことだった。

ただしその系図は彼自身がまだ見ないうちに失われてしまった。彼は徳富蘇峰の『日本国民史』

『近世日本国民史』の誤まりか）に蔵久の人物像が子供の頃聞かされていた通りに書かれていると言ひ、その系図の紛失を惜しんでいる。

その蔵久から何代かの後、広津家は久留米の有馬家に仕える儒者の家柄になった。父柳浪から四代ほど前の広津藍溪（藍溪の誤まりか）が特に有名で、久留米市内に嘗て「藍溪先生の碑」が建っていたが、その子孫と称する者がその碑を毀し、その石で水盤をこしらえてしまった。それを聞いた久留米の或る高等女学校の校長が憤慨し、広津の叔父倉富勇三郎に訴え、へこれは和郎さんが再建すべきだと言ったという話を彼は叔父から聞かされた。

この藍溪の次男で長崎の医家馬田家を継いだ馬田昌調（まだしやうよう）は「朝顔日記」の作者として有名で、蜀山人らとも交遊があったという。

この「朝顔日記の作者」の記事によれば、嘗ての広津が戦国時代の武将島津蔵久を広津家の先祖と考えていたことは明らかである。ところが彼は『続年月のあしおと』では広津家の先祖を有馬藩の儒者広津藍溪として、藍溪以前の先祖には全く触れていない。これはなぜだろうか。私はその理由を次のように考えている。

『続年月のあしおと』の「二 先祖の血」に、広津が久留米市編纂の久留米人物伝記『先人の面影』を手に入れた記事が見えるが、その中の「馬田昌調」の項には、広津家の先祖の名が島津蔵久ではなく、もと薩摩の人で藍溪の祖父大膳太夫弘親と記されている。彼は先祖の名が教えられていた名

と違ふのに疑念を抱いたのではなからうか。また同じ「先祖の血」によると、広津家の仏壇の抽斗ひきだしに藍溪以後の広津家代々の人名を記した点鬼簿があったという。彼は異伝と思われる『先人の面影』と「朝顔日記の作者」の記事を捨てて、實在性の確かな藍溪を先祖としたのであろう。

『先人の面影』の篠原正一氏の手に成る藍溪の略伝には、その経歴や人柄が次のように描かれている。

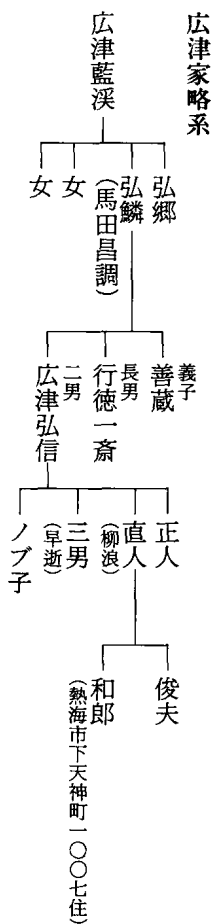
藍溪は宝永六年（一七〇九）五月、上妻郡（八女郡）福島村（筑後市福島町本村）に生まれ、父は弘直と言ひ農を業とした。俗名を善藏という。幼時から学問を好み、はじめ合原窓南に学んだがのち服部南郭の門に入り、自ら一家の学を成した。宝暦二年（一七五二）以来、藩中子弟の教育の任に当り、藩校の創設等大いに教育方面の功績を挙げ、藩に仕えること六十七年間、寛政六年（一七九四）十一月十三日没した。時に八十六歳。

この経歴からうかがわれるように藍溪は「勤勉努力の人」で、病床にあつても、手から本を離さなかつたが、人生に対しては実に楽天的で、幸不幸何事にも「有難い、有難い」を口癖にした。また他人に接する時は決して権式張つて威容を作るようなことはなかつたという。藍溪が創設した藩校修道館はのちに明善堂と改称され、今日なお福岡県立明善高等学校としてその学統を伝えている。『先人の面影』の「馬田昌調」によると、昌調は藍溪の次男に生まれ、諱を弘鱗いみな、字を昌調あきなりと言つた。のち長崎の医家馬田家を相続して馬田昌調と言つた。一時大阪の南本町に住み、医者をやとす

る傍ら、稗史（小説）の筆を執り、雨香園柳浪または稗海亭青洋と号した。広津の父柳浪の号はこの人から取られたものである。

歌舞伎狂言、人形浄瑠璃として有名な「朝顔日記」は昌調の稗史を粉本としている。全七冊の稗史『朝顔日記』は文化八年（二八一）に出版され、翌九年「生写しょうつしあきがおこつ葬日記」という題で大阪で初演されている。第二次大戦後、広津は伊原青々園から『朝顔日記』の原本を贈られたが、熱海の大火の時焼失してしまった。昌調は文政元年（二八一）十月二十日に死去し、法号を綱雲院杏昌調林居士という。

次に『先人の面影』所載の藍溪以降の広津家略系図を掲げる（杉本寿恵男氏作成）。



私はこの系図について次のような私見を述べてみたい。「先祖の血」によると、広津は前述の点鬼